

一つの地域に継続的に関わることの意義 ～茨城県神栖市～

山本司1、阪本直人2 3、古幡保之4、地場凜々子1、結城舞1、田中さくら5、鈴木颯斗6、前野哲博2
1.筑波大学医学群医学類、2.筑波大学医学医療系地域医療教育学
3.神栖済生会病院、4.名古屋市立大学、5.京都府立大学文学部、6.法政大学経営学部

(筆頭演者ならびに共同演者に、開示すべきCOIはありません。)

背景・目的

プライマリケア領域では、患者・家族への視点に加え、コミュニティを診る視点、すなわち、地域特性や健康の社会的決定要因(以下、SDH)を考慮した包括的な視点で診ることが求められる。この視点を養うため、筑波大学では医学生に対し、前述の視点を考慮した医学教育を実施してきた。特に神栖市では、地域診断や異業種帯同・協働作業などを通じた文化人類学的な視点から学習できるよう設計されている。このプログラムに、暮らしと医療をテーマに全国各地で合宿を開催する学生団体「ちいこ」*らが全国各地から参加した。これを契機に、学部を超えた大学生が継続的に関わる活動へと発展してきた。

学生の継続的な関わりが構築された経緯



*『ちいこ～地域と医療のすべてがここにある～』は、地域医療に関心のある医療系学生らが集うオンラインコミュニティで、全国各地で地域の暮らしを知る合宿を企画している

茨城県神栖市について

神栖市イメージキャラクター
カミスコくん

- 人口: 約10万人 (都会すぎず田舎過ぎない規模)
- 生産年齢人口: 63% (若い世代が多い)
- 医療課題: 人口当たりの医師数が全国平均の半分であり、医師確保が急務の問題となっている

神栖地区
→工場労働者特有の健康問題
石油、鉄鋼などの産業集積地(約180社、2万人)。加えて、点検・修理のために年間約40万人が入場

波崎地区
→高齢化・交通弱者の問題
・ピーマンなどの農業やいわしなどの漁業が盛ん
・極端な車社会(電車なし、バスは1時間に1本など)

活動内容

活動の目的

学生が、地域における暮らしと医療を知り・体感する中で、コミュニティの魅力発見と関わり方を模索すること
継続的な関わりの中での活動の変化

活動の実施方法

2023年8月～2025年2月
計10回の学生×住民との交流

対面でのイベント
参加・企画運営

オンライン上で
企画準備・振り返り

各回、有志の住民や総合診療医の協力を得て、実施する内容を学生主体でその都度検討し継続的に実施。



準備段階から市民が参画

医療を知る

医療現場に触れながら、地域に求められる医療を把握

救急外来同行
訪問診療同行
産業医同行

暮らしを知る



住民との語り



住民と協働してイベントの準備



異業種帯同・農業等の協働作業



住民と共に写真を撮りながらまち歩き

自分とは違う視点で物事をとらえる機会となった。住民が抱く医療への思いを聞くことができた。

イベントに関わる

・学生実行委員として行政や医療者と協働して企画から関わる
・将来医療を担う学生として意見を述べる

神栖に関わるたくさんの人と出会った神栖を舞台に、地域の医療の問題について考えることができた。医療者・行政・住民の3つの視点から医療の問題を捉える機会になった。

地域の医療の課題を住民から聞くことができた。他のワークショップに出展する地域で活躍する人にも出会えた。

イベントを実施する

「神栖の医療について考える」をテーマにワークショップを学生が企画し、病院イベント※に出展した。来場者と対話し、地元の医療に関する課題抽出も行った。

※神栖済生会病院オータムフェスタ・・・
1. 住民と医療者との交流の場
2. 市内で活躍するNPOや福祉団体を住民に知ってもらう
これらによる社会課題解決に向けたプラットフォームづくりが狙い

地域医療シンポジウム～神栖で地域医療の神髄に触れよう～
地方創生医師団・さらっせプロジェクト共催
概要: 全国各地から医学生、医療機関の医師や事務スタッフ、自治体職員、大学教授、シンクタンク関係者や住民の指導医、住民など約200人が参加し、神栖の医療について、2日間にわたり活発な議論を交わした

継続的な関わりによる代表的なエピソード

学生1 「学生の存在が心の支えになった」と言ってもらえたエピソード



医学生のそばを片時も離れず

前回の合宿で仲良かった4歳の女の子が、私の参加を聞きつけ、遠方から母と会いに来てくれました。兄を亡くした彼女は、私との再会を励みにしていたそうです。母親は娘さんの気持ちを汲んで、夕方のいちご狩りまで共に過ごしました。別れ際、彼女が泣きたいのを堪えている表情は今も鮮明に覚えています。彼女の心の支えに少しでもなれたのであれば、嬉しいです。

学生2 住民との何気ない会話から得た「活動の継続性」の原動力



市民風車建設の苦労話や地元への想いをお伺いして

住民の方から「地域活動を『趣味』と捉えることで継続できる」という事を聞いてから、地域医療や地域活動が生活の延長上に存在するものと腑に落ちました。僕自身、地域への愛着心が芽生え、地域活動や地域医療に貢献していきたい気持ちを強く感じるようになりました。

考察

立ち上げ期

地域性を知る

成長期

学生の役割を見出す

継続期

地域での“輪”作り

行政

学生

住民

1. 学生と住民らが相互にもたらした変化とは

(1) 学生がもたらされた変化

住民との対話や協働を通して、医療者としてどうあるべきかや将来の働き方について考えるきっかけになった

① 地域に対する持続可能な関わり方

趣味のように地域活動を行っている住民を見て、将来地域に継続的に関わる際、「使命感」だけではなく「楽しさ」も原動力の一つで良いと思えた。

② 患者の本音を通じた医療の向き合い方

医療者へのやるせない思いを抱く住民と出会い、関係性を築く中で、本音を聞くだけではなく互いに寄り添いたいと思う気持ちが芽生えた。

③ 患者の思いをくみ取った医療の提供

普段病院では接しない住民と協働し接する中で、住民がどのように医療者や病院を見ているのかを知った。患者の思いをくみ取った医療を提供したい。

(2) 学生がもたらした変化

行政の変化

1. 今年の学生主体イベントを開催
2. 地域医療の課題に対する関心が高まった
3. 学生活動への関心も広がっている

住民の変化

1. 家族や友人のような関係性を築くことができ、学生との対話の中で医療を身近なものとして捉えることができ、結果的に医療への理解が深まった。
2. 医療への理解が深まる同時に、自身の健康や地域医療に対する関心が向上した。
3. 学生の教育者としての役割を認識し、学生の成長をともに喜びあえるようになった。

地域の変化

神栖を「好き」と語る学生の存在が、行政や地域にとってもポジティブな刺激となった。学生が持ち込む新たな視点が、地域に新たな変化の兆しをもたらしている可能性がある。

2. 上記2つの変化が生まれた理由

① 学生は「よそ者」としての視点を持ち、地域を客観的に見つめる立場にあった。

① 学生の特性

② 住民と本音で語り合える関係性が構築されたことで、ネガティブな側面も含めた地域のリアルな姿に触れることができた。

② 住民との関係性

学生・地域の
変化

③ 地域性

③ 神栖という地域が、医療課題が明確であり、距離の近い人間関係の中で深い学びが得られた。また、都市部では得がたい「顔が見える関係性」「自分の居場所」といった体験がしやすかった。

今後の展望

継続的な活動により、地域の課題に学生と住民が協働して取り組める関係性になった。今後は、この活動をさらに継続し、住民と共に課題に取り組むたい。学生が継続的に地域に関わる活動が、他地域へも波及することを期待する。学生グループとして関わることで得た継続性については今後検討したい。

神栖市から
拡がる“輪”
づくり



謝辞

各企画に関わってくださった地域住民の方々、全国各地の学生、つくば総診の先生方に感謝を表明する。



©神栖市